

平成26年8月11日

木呂子敏彦を語る

木呂子 真彦

1. 木呂子敏彦は、大正3年3月、北海道十勝支庁池田町で生まれました。

平成17(2005)年4月92歳で亡くなっているのです、今年生きていれば100歳です。私は、敏彦の次男です。

2. 父親は、祖父が凡庸であったからか、自分の師を自分の父親以外に求めたような気がします。少年期からの師事した人は、影響を受けた時代順に後藤清香、賀川豊彦、暉峻儀等、高村光太郎、保田與重郎でしょうか。

読書家で、自分が読んだ本で、自分が重要と思ったところには必ず赤線が引かれております。私自身、父親の書庫(当時文庫本を含め1万冊くらいの蔵書)の中で育ったようなもので、中学時代から、戦前・戦後の紙質の悪いその様な赤線が引かれた本を読んでいます。だからと言って、書齋の人ではありません。旧制帯広中学を卒業、すぐ代用教員をやっておりますが、あくまでもその現場から、教育、農業、地域のことを考え、いろいろな本を読んでいます。そこで得た知識をまた現場に適用できるか考えています。

3. 教えるのに農業を知らなければと、その頃設立された十勝農業学校研究科に入学、翌年には、研究科の助手となる一方、十勝の各地の農業を担う青年達と十勝興村連盟をつくり活動する。その活動が、研究科をつくった張本人で、たまたま視察に来た佐上北海道長官の耳に入ったのか、翌年北海道庁の学務課社会教育主事補になり、北海道の青年団を統括する協会の事務局長となり、『北海青年』を編集する。佐上長官辞任後、道庁に留まったが、石黒長官就任後、後藤清香の運動で旧知であった加藤善徳から、雑誌編集者にならないかと誘われ上京する。

4. 雑誌『生活』の編集に携わり、雑誌に詩のコーナーを設けるため、高村光太郎を訪問、詩人仲間を紹介してもらうとともに、宮沢賢治のことを教わる。その縁で藤原嘉藤治主宰の第1回の「東京宮沢賢治研究会」に出席する。

畏友金子智一に誘われ、倉田百三主宰の「生きんとての会」に入る。会合の会場は、自分の職場である佐藤新興生活館(戦後現在の山の上ホテルになる)の講堂を使用し、「生きんとての会」の幹事となる。佐藤セツと結婚。

5. 昭和16年8月に召集、函館で訓練を受け、宗谷要塞重砲兵連隊第1中隊に編入される。陸軍幹部候補生となり、横須賀の陸軍重砲兵学校に入学。甲幹過程を終え、第2中

隊付見習士官。17年11月、高野中隊長とともに、西能登呂要塞（宗谷海峡を挟み対岸の樺太の自主所在）に着任。糧食補給を断たれたのを機に自給自活の軍隊をつくる。

昭和20（1945）年8月30日に武装解除、そのままシベリアに抑留される。昭和22（1947）年12月ナホトカから抑留者帰還船大安丸にて函館に帰還。引揚援護局の名簿の脱漏に「棄てられた部隊」と直感、中隊の全員の消息を知らせるため、「自主通信」第1号を発行。24年の第5号で部隊の唯一1名を除き消息確認。最後の一人鈴木栄氏は昭和33年に収容所で死亡したことを確認し、戦友の消息確認作業を終える。

6. 十勝に戻り、帯広柏葉高校の非常勤講師とラジオの行商をやっているうちに、公選制の教育委員に勝手に立候補させられ、当選する。昭和31年まで2期務める。教育委員時代は、北海道のへき地教育、農漁村の定時制学校設立に奔走する。この時代に国から予算を獲得し、ユニークな学校建築イトの弟子で現在はえぞライトと呼ばれている田上義也と組んで、日高の平取町の二風谷小学校（風呂付の小学校）、釧路の阿寒町のまりも校舎、渡島の南茅部町（現在は函館市）の船のブリッジを模った校舎を建築する。

7. 昭和31（1956）年の教育基本法制定で、教育委員の公選制は廃止され、北海道農業自立推進協議会の常任理事に就任し、移動むらづくり大学を開催、自らコーディネーターとして参加、この移動大学のコーディネーターは、帯広市の助役退任後再び続ける。

8. 昭和35（1960）年、幼友達の吉村博帯広市長からの要請で、帯広市の経済厚生部長に就任。帯広市は全国に先駆け市の総合計画を策定したものの、革新市長に対する町村金吾道知事の非協力的対応で頓挫していた。道教育委員時代の文部省との予算折衝手腕を買ったものと思われるが、まず東京に帯広シンパをつくるべく当時はまだ無名の下河辺さんをはじめとする官僚を委員のメンバーに入れ帯広委員会をつくった。

情報収集のため役所を訪れると、お土産の六花亭（当時の帯広千秋庵）の昔のかます（わらを二つ折りにし、縁を縫いとじた袋。穀類の貯蔵・運搬に用いる）を模したパッケージのらんらん納豆を課の女性に渡し、課長席で課長と挨拶すると相手の了解のもと机上の報告書をこれ頂きますと言って、らんらん納豆を渡して空いたリュックに詰め込み帰るようなこともやっていたようだ。就職後、北海道開発庁の方から、「お前のお父さんが役所に顔を見せたら、机の上にある資料は隠せ」と言われていたと教えられた。このため、北海道庁より当時、帯広市は国の情報を事前に収集し、情報を持っていた。

最初に手掛けたのは既成市街地と同じ広さの工業団地の造成計画で、用地取得から分譲まで手掛けた。分譲開始後、地元の十勝毎日新聞に折につけぺんぺん草の生える工業団地と批判されていた。同時に年始挨拶に1,000字の所感を綴る「独言独語」をはじめ、全国の知り合った方々毎年千通以上を送った。また、日本経済新聞の文化欄に「水と空気が日本一うまい街」と紹介した。このキャッチフレーズは、六花亭（帯広千秋庵）の先

代の小田さんが、このキャッチフレーズにお菓子を加え、自社のキャッチフレーズに使って頂いたようだ。さすが六花亭になり、現在の小田社長のもと使っていないと思っていたら、5年前或る方の香典返しで送られてきた六花亭のダンボール箱にこのキャッチフレーズが印刷されていたのにびっくりした。

9. 西帯広工業団地に中央の有数企業の工場を企業誘致しようと、長野県の諏訪地方の企業や関西の松下電器関連、当初は松下電子の工場を誘致しようと京都の長岡京の本社に通っていたようだ。ところが、その話が、いつの間にか当時の松下電工の丹羽社長が、やはり青年時代希望社運動に関わっていて、後藤清香の心の家で発行した箴言集『権威』を自社社員教育用に大量に買い込んだのをきっかけに後藤清香との縁が復活し、それが結果として加藤善徳氏が仲介役となって松下電工がこの工業団地の中核企業として進出することになった。丹羽社長は、PHP研究所設立にも関わりあっており、私の子供の頃の記憶では小冊子の体裁で、最初に箴言がり、後藤清香の『希望の友』のスタイルを踏襲したものでなかったか。

10. 吉村市長は、革新市長なので、旧制帯広中学同期で地元自民党選出の本名武代議員は、選挙の度に対立候補を立て、帯広市には非協力の関係にあった。ちょうどその頃、大野伴睦の秘書をやっていた中川一郎が、中選挙区の北海道5区で地元十勝から立候補しようとしていたが、支持基盤がなかったため、吉村市長の支持基盤である後援会との連携を模索していた。父親が立会人になって衆議院選挙では吉村市長の後援会は、中川一郎を支持することになり、中川一郎は衆議院初当選を果たすことになる。これで、政治的には地元の衆議院議員も帯広総合計画推進を支援する体制がお整うことになった。

11. もう一つの壮大な計画が「帯広の森」計画であったが、吉村市政では実現せず、中川派の田本市長の時代に「帯広の森」は完成する。

これは、吉村市長は、ウイーンの森を想定していたが、私の父はフランクフルトの森の様に都市で森を囲むという考えで、必ずしも一致はしていない。両者は田園都市20万構想では目標は一致していたが、森に対する考え方で違いがあった。

父親の考えは、帯広を森で囲み、20万人の人口の都市を形成、増大する人口は森の外の町村が受け入れ発展させるといったような考え方はなかったかと思う。

しかし、総合計画では、モタリゼーションによる自動車の普及と中川一郎が自民党の中で領袖になるにつれ、十勝への公共投資が増え、帯広市と周辺町村との交通アクセスは飛躍的に至便になった。その結果、17万人まで成長した人口は、若い世帯人口は、周辺町村の新興住宅地に我が家を求め、例えば、音更町は45千人、幕別町は28千人と人口増加する結果となっている。帯広の旧市街地は、地価は高いものの空き地となりインナーシティ問題が顕在化するようになっているのが現状である。

12. 帯広市役所を辞めてからは、帯広がどう変わるのか、その行末がどうなるのか気にかけて、時には具体的に提言し、時には批判し活動を続け、執筆活動を始めます。

その大きなものは、山本先生が居られた「旭川大学地域研究所年報」へ毎年寄稿した論文です。

そしてその集大成として平成16年2月『木呂子敏彦著作集 鳥の眼、みみずの目』を多数の方のご賛同を得て出版することができました。